

『就実論叢』第44号 抜刷

就実大学・就実短期大学 2015年2月28日 発行

「親子フラ教室」における模索と探求の過程 —レッスン使用曲の変遷から—

**The Didection-exploring Process of a Hula School for Parents and Children:
the Change of Tunes for Lessons**

山 田 美 穂
下 山 真 衣

「親子フラ教室」における模索と探求の過程

—レッスン使用曲の変遷から—

The Didection-exploring Process of a Hula School for Parents and Children:
the Change of Tunes for Lessons

山田美穂

下山真衣

YAMADA Miho

SHIMOYAMA Mae

1. はじめに

2011年7月から続いている「親子フラ教室」の活動は、4年目を迎えた。これまでに、2013年9月までの経過を報告してきた（山田・下山，2012；2013；2014）が、その後の1年は、合同発表会への参加、特別レッスンの開催、出張フラのボランティア等、学外と交流する大きなイベントを経験し、またその中で活動の方向性を見つめ直すことが必要な時期であった。本稿では、まず2013年10月～2014年9月に実施された計23回の活動記録をもとに、この期間の経過を報告する。さらに、活動開始からのレッスンで使用した全曲を振り返ることを通じて、フラ実践の模索と探求の過程を辿る。

2. 活動経過

親子フラ教室は基本的に月2回開催、6回を1クールとして活動している。本稿では、前稿に続く第8クールの途中（#47）から第11クールまで（2013年10月～2014年9月）の活動記録を元に、経過を記述する。各クールの期間等の概要を表1に示す。#47の時点で継続参

表1 第8～11クールの概要

	第8クール（#42～48）	第9クール（#49～54）	第10クール（#55～60）	第11クール（#61～69）	
期間	2013/8/23～2013/10/23	2013/11/6～2014/1/23	2014/2/21～2014/5/9	2014/5/28～2014/9/24	
回数	7回（#44は天候不良で中止）	6回（5回＋茶話会）	6回（5回＋茶話会）	9回（茶話会なし）	
活動場所	E101模擬保育室，体育館多目的ホール（#42）	E101模擬保育室	E101模擬保育室，T608ダンス教室（#54）	E101模擬保育室（#62,64），T608ダンス教室	
参加者のべ人数 （1回あたり平均）	親子	36組（6組） ※子ども51人	39組（6.5組） ※子ども50人	32組（5.3組） ※子ども40人	58組（6.4組） ※子ども76人
	学生スタッフ	33人（5.5人）	55人（9.2人）	32人（5.3人）	68人（7.6人）
フラ練習曲	ケ・オネ・ナニ・ヴァレ	アウヘア・ヴァレ・エ・クワイボ	ヘ・レイ・ウィリ・イア・ノ・ラカ・エ	カラニアナレ／手をつなごう	
子どものためのダンス曲	バクバクフラダンス	バクバクフラダンス	バクバクフラダンス／エビカニクス／サンサンたいそう	バクバクフラダンス／エビカニクス／サンサンたいそう／ありのままで／妖怪ウォッチ	

加中だった親子は、Aさん、Bさん、Dさん、Gさん、Hさん、Jさん、Kさんの計7組だった。そのうち、きょうだい2人での参加は3組であり、子どもの参加人数は計10人、年齢は1歳5か月～3歳9か月であった。

(1) 第8クール 2013/8/23～2013/10/23

8/23～9/25 (#42～46)の経過は前稿にて報告済みである。6/1に実施したフォーカス・グループ・インタビューでの母親たちのアイデアを受けて「パクパクフラダンス」に振付をして踊ってみたところ、子どもたちの反応がよかったため、第8クールからは「アロハ・エ・コモ・マイ」に代わって毎回活動開始時に全員で踊ることになった。

10/5に、第一筆者(山田)が師事するハワイ人クムフラ(フラの指導者)、クム・ケアラ・チンとその生徒たちの合同発表会が、横浜で開催された。この発表会に、有志の親子3組、



図1 合同発表会

学生3人が参加し、練習の成果を披露した(図1)。披露した曲や衣装については後述する。出演したダンサー約50人の中で、親子フラ教室の3歳の子どもたち3人が最年少であった。300人収容のホールステージに登場すると、観客席から「かわいい!」と歓声があがり、子どもたちの動作一つ一つにどよめき起きた。観客だけでなく母親、学生、筆者も驚くほど、子どもたちはチャントやダンスを覚えており、直前まで衣装を嫌がったりもじもじしたりしていたと思えないほどであった。観客の反応に驚いてダンスをやめてしまう場面もあったが、終始堂々と振る舞っていた。そんな子どもたちの姿に、大人もリラックスし、自然と笑顔で踊ることができた。終了後には「意外と緊張しなかった」「子どもたちが踊っていてびっくりした」と、興奮しながら話し合った。

2日後の10/7に、本学のT608ダンス教室で、クムフラによる特別レッスン(#47)が行われた(図2)。要望は、子ども対象と大人対象、両方のレッスンをしてほしい、という程度の最小限にとどめ、後は受講者の状態に合わせてレッスンを展開してもらうことにした。親子参加者は作ったばかりの衣装でクムフラと通訳の女性を迎え、レイをプレゼントした。

まず子どものレッスン、お菓子作りの得意な母親と学生が持参したお菓子を囲んでティータイム、大人のレッスン、という流れでの2時間であった。子どものレッスンは、集中力を高められるようにおもちゃを片付け、短い遊び歌をはさむ等の工夫と共に、基本的な動



図2 特別レッスン

きの教え方を学んだ。ティータイムでは母親たちが積極的に質問をしていた。大人のレッスンではまずベーシックステップの練習を行った後、即興でオリジナル曲「アウヘア・ヴァレ・エ・クウ・イポ」が披露され、振付の指導がされた。

第8クール最終回の茶話会 (#48) では、合同発表会と特別レッスンでの体験が共有された。合同発表会では、子どもたち、母親、学生と一緒に出演できたこと、参加しなかった親子も一体感を味わえたこと、特別レッスンではクムフラとの出会いを通じてフラへの関心と理解が深まったこと、などが語られた。

10/27には、なでしこ祭の学科企画「ハートカフェ」のライブコーナーに出演した。ほぼ全て古典フラ曲のみの構成に初挑戦した。

(2) 第9クール (2013/11/6～2014/1/23)

特別レッスン (#47) で教わった「アウヘア・ヴァレ・エ・クウイポ」を練習した。また、子ども向けレッスンの時間を設け、10分ほどベーシックステップとハワイ語の手遊び歌を試すようにした。



図3 クリスマス会
(幼児教育学科学生によるダンス)



図4 クリスマス会 (集合写真)

12月にはクリスマス会を開催した (#51)。前年に引き続き、幼児教育学科のズビャーギナ山田先生とゼミ生の皆さんにゲスト参加してもらい、コラボレーションを楽しむことができた (図3, 4)。また、学生スタッフのアイデアと制作で、活動中の写真をレイアウトしたアルバムが用意され、サンタに扮した男子学生から子どもたちに手渡された (図5)。



図5 子どもたちへのクリスマスプレゼント

1/29の茶話会 (#54) では、学生スタッフが母親に子どもたちへのかかわり方について質問する回を設けた。輪になって座り、教育者・援助者を目指す学生たちが、親子フラ教室で子どもたちとどうかかわるべきなのか、自身の苦手な課題も含めて語り、母親たちに問い、母親の立場からの見解を求める姿があった。「子どもたち同士のけんかが始まった時に、ど

う介入すべきか」「お母さんたちには自分たち学生のかかわり方がどう見えているのか」という問いかけに、母親たちは「私たち親も迷いながらやっている」「自分の持ち味を活かして、色々試してみたらいいのでは」と、温かく率直に答えてくれた。

(3) 第10クール (2014/2/21～2014/5/9)

前クールの「アウヘア・ヴァレ・エ・クウイボ」に続き、パフドラム（太鼓）で伴奏を行う「ヘ・レイ・ウィリ・イア・ノ・ラカ・エ」を練習した。

2/28 (#56) と 3/21 (#57) には、来年度へ向けてのミーティングを行った。第一筆者が師事していたクムフラの指導から離れることに伴い、事情の説明としばらくは外部での発表会への参加や特別レッスンが計画できないことをお詫びした。自身の都合が親子フラ教室の活動に影響してしまうことに対する罪悪感など、複雑な感情があることを第一筆者が打ち明けると、母親たちは強く励ましの言葉をくれた。

また、この機会に、親子フラ教室の方向性について、「古典フラの探求」という側面が強くなっていた状態と、本来の目的である「母親のためのリラクゼーション」という側面とのバランスを見直すことを提案した。具体的には、子どもたちが大人と一緒にフラを踊りやすいように工夫はするが、子ども向けレッスンとしての強化はしないこと、前クールの茶話会で提案されたウクレレ教室や、前年からアイデアを温めていたバンド結成など、古典フラに限定しない活動をしてみることなどである。しかし、活動内容を完全に变えるのではなく、クムフラに学んだ曲の練習は続け、イプヘケ（ひょうたんの楽器）制作、プイリ（竹の楽器）購入などの楽器使用曲への挑戦なども行うこととした。

4/30 (#59) より、Mさん親子が参加した。mちゃん（3歳9か月）には障害があり、立位をとることやことばでの会話はできないが、音楽やダンスが好きで、身体を使って人と積極的にかかわる力があり、初回から学生スタッフとも自然に馴染んでいった。

(4) 第11クール (2014/5/28～2014/9/24)

プイリを用意し、子どもたちも一緒に「カラニアナオレ」を練習した。8月9日は、Mさんの紹介による、障害者医療福祉施設での出張フラと、なでしこ祭ハートカフェおよびダンス甲子園への出場に向けて、ステージ披露の練習を行った。

施設での出張フラ（8/20）では、普段は各種指導活動に使われる広い部屋に、入所・通所の利用者とスタッフの皆さん約40名が見に来られ、親子フラ教室からは親子7組、学生3名が出演、学生1名と教員1名がサポート役となり、30分・全5曲を披露した（図6）。



図6 障害者医療福祉施設での出張フラ

2012年11月に、親子サークルの活動にゲスト参加して公民館でフラを披露したことはあったが、福祉施設を訪問してのフラは今回が初めてであった。どのような雰囲気になるか未知であったことに加え、MCをKさんにしてもらうこと、教員は裏方に徹すること、学生と子どもたちだけで「パクパクフラダンス」を踊ることなど、初の試みも取り入れたため、不安もあったが、「フラは心で踊るもの」を合い言葉に、ミスをしないうことよりも、踊る楽しさやフラを見て喜んでもらいたいという気持ちを伝えられるように踊ろうと話した。

観客である施設の皆さんは重度の障害があり、大きな拍手等のわかりやすい反応は少ないにもかかわらず、フラを心から楽しみ喜ばれていることが感じられ、温かい空気に包まれていた。

出張フラ終了後は、なでしこ祭に向けてオリジナル曲「手をつなごう」の練習を始めた。11/1に、Hさんの紹介で高齢者福祉施設での出張フラも決定し、準備を進めていった。

3. レッスン使用曲のレビュー

親子フラ教室では、原則として1クール1曲のペースでさまざまなフラ曲に取り組んできた。古典フラの実践の一環として、踊りを伴わないチャントにも挑戦し、またキッズダンスタイムとして子どもにも踊りやすい曲を探し、全員で踊る時間を設けている。それら全てをあわせると、活動の中で取り組んだ曲は計21曲にのぼる。これまでの活動報告ではタイトルとジャンルの記載にとどまっておき、各曲の詞の内容、フラの中での位置づけ、練習曲として選んだ理由について、詳細に記述する機会はなかった。そこで本稿では、全曲を紹介し解説することを通して、親子フラ教室の実践を振り返る。

親子フラ教室のレッスンで用いた曲を、(1)現代フラ（フラ・アウアナ）曲、(2)古典フラ（フラ・カヒコ）の踊りを伴う曲、(3)踊りを伴わないチャント（オリ）、(4)キッズダンス曲に分類し、親子フラ教室でレッスンを行った時系列に沿って並べたのが表2である。(3)踊りを伴わないチャントは、本来は古典フラのカテゴリーに分類されるものである。また、(4)キッズダンス曲の中には現代フラに分類することが可能な曲も含まれるが、ここでは便宜的に(1)～(4)に分類しておく。以下、各分類ごとに紹介する。

表2 親子フラ教室で取り組んだ練習曲

	(1)現代フラ（フラ・アウアナ）	(2)古典フラ（フラ・カヒコ）	(3)踊りを伴わないチャント（オリ）	(4)キッズダンス
第1クール（#1～5）	①月の夜は			⑦アロハ・エ・コモ・マイ
第2クール（#6～11）	②ホワイト・クリスマス			
第3クール（#12～17）	③エ・フリマコウ			
第4クール（#18～23）	④ハナレイ・ムーン			
第5クール（#24～29）	（ハナレイ・ムーン続き）			
第6クール（#30～35）		⑥ウラノヴェオ	⑩ホー・マイ・カ・イケ	
第7クール（#36～41）	⑤見上げてごらん夜の星を	⑧カヴィカ	⑨カウ・マイ・カ・ラー ⑮ヒキ・マイ	
第8クール（#42～48）		⑩ケ・オネ・ナニ・ヴァレ	⑯ヴァイ・オ・カ・ラー	⑧バクバクフラダンス
第9クール（#49～54）		⑪アウヘア・ヴァレ・エ・クワイボ		
第10クール（#55～60）		⑫ヘ・レイ・ウィリ・イア・ノ・ラカ・エ		⑩エビカニクス ⑳サンサンたいそう
第11クール（#61～69）	⑥カラニアオレ ⑦手をつなごう			㉑ありのまま ㉒妖怪ウォッチ

(1) 現代フラ (フラ・アウアナ)

①月の夜は

日本では、フラダンスの入門曲として最も広く知られている。原曲は「ソフィスティケイテッド・フラ」という英語詞の曲であるが、日本人ハワイアンバンドが「月の夜は～」で始まる詞をつけてヒットさせた(早津, 2007)。英語詞も日本語詞も、フラを踊ることそのものがテーマとなっているが、「ソフィスティケイテッド・フラ」の詞では、「街の噂になるようなおしゃれでセンセーショナルなもの」としてフラが描かれるのに対し、「月の夜は」は、「ヤシの木陰で仲間と楽しく踊るもの」として描かれている。両者の描写の違いに、アメリカ人から見たフラのイメージと、その少し後の時代に日本人から見たフラのイメージとの相違が現れていると考えられる。

親子フラ教室でも、最初の練習曲としてこの曲を選んだ。いわゆるハワイアンソングらしい明るい曲調や、日本語の歌詞に対して、踊ることに慣れていなくても楽しみやすいという感想が多く聞かれた。

②ホワイト・クリスマス

クリスマスの定番曲である。ハワイでも日本でもクリスマスシーズンに踊られる。なぜ元々ハワイと直接関係のない曲にフラの振付がされ、定番曲になっているのか、由来は不明である。この曲の歌い手として最も有名なビング・クロスビーは、ハワイを舞台とした映画「ワイキキの結婚」に主演し、劇中歌の「ブルーハワイ」「スイート・レイラニ」などをヒットさせており、彼の「ハワイアン名唱集」は二枚組 CD となって現在も日本で発売されている。これらのことから、ビング・クロスビーや彼の歌ったホワイトクリスマスが、ハワイでも親しまれていたこと、数あるクリスマスソングの中でも、ゆったりしたテンポや視覚的にイメージしやすい詞がフラに向いていたこと、などが、背景としてあるのではないかと推測される。

この曲を2曲目に選んだのは、時季的に合っていたことと、日本でもよく知られたメロディーであることが理由である。

③エ・フリマコウ

1949年にハワイ島のホテル従業員だった男性が作詞作曲をし、ホテルのショーで踊られていた曲である(鳥山, 2009)。タイトルは「一緒に踊ろう」であるが、セクシーな意味にも取れる歌詞であり、ハワイでは現在もパーティーチューンとして歌われ、踊られ、盛り上がる曲である。ハワイで最も格式のある競技会メリー・モナーク・フェスティバルで、大ベテランの高齢女性ダンサーが、客席の若い男性客を挑発しながら踊って大喝采を浴びたというエピソードがある。女性のチャーミングさを表現しやすい曲であると思われる。

「月の夜は」と同様に、フラ初心者の課題曲とされることが多い。目(マカ)、手(リマ)、身体(キノ)、愛(アロハ)という同じ歌詞が何度も出てきたり、回る(エフリ)、前(イム

ア)、後ろ（イホペ）という動作を示す語が出てきたりと、ハワイ語学習の教材としても適している。

ターンするステップが多く使われていることから、親子フラ教室では「くるくる回る曲」と呼ばれている。母親たちが踊る姿を見て、学生スタッフも「あのくるくる回る曲を踊りたい」と希望し、数人がマスターしてステージ披露もしている。

④ハナレイ・ムーン

カウアイ島のハナレイ湾の美しさと、恋人への思いを歌った、1970年代の曲。ハナレイ湾は夕日のスポットとしても有名であるが、この曲では月夜の浜辺の風景が描かれている。

ムーディーな曲で、ゆったりしたテンポであるが、レレ・ウエヘやコウアカなど、やや難易度の高いステップが振付に入っていることから、親子フラ教室では2クール、約半年かけてマスターした。その取り組みの過程で、参加者間に古典フラへの興味が高まっていったのは、第一筆者が古典フラのトレーニングを始めたということだけでなく、現代フラの入門編はひとまず終えて、次の段階へ進みたい、さらに奥深い世界に触れたい、という意欲が参加者間で共有されるようになったためと思われる。

この曲を練習した第5クールで、現代フラへの取り組みは一区切りとなり、第6クールからは古典フラに挑戦することとなった。

⑤見上げてごらん夜の星を

坂本九のヒット曲。振付をした原久美子医師は、内科クリニックの院長であり、患者対象のフラ健康教室を主宰しているフラ教師でもある。元々ゆっくりしたテンポの曲であり、星、幸せ、歌う、夢、祈る、などのモチーフが、フラによく合っており、振付も、健康問題を抱える中高年のフラ初心者にも安全に楽しんで踊りやすいように工夫がされている（原，2008）。

親子フラ教室では、古典フラのみに取り組んでいた時期（第7クール）に、2回だけ別枠で現代フラレッスンをを行い、この曲を練習した。第6クール以降に参加した母親や学生にとっては現代フラの踊り方が新鮮だったようで、ゆっくりした柔らかい動きの方が難しい、という感想があったり、古典フラと現代フラのどちらが好きか、という意見が交わされたりした。

⑥カラニアナオレ

クム・ケアラ・チンが作詞、作曲、振付をした曲である。タイトルの「カラニアナオレ」とはジョナ・クヒオ・カラニアナオレ王子（クヒオ王子）のことである。クヒオ王子はハワイ王朝の王位継承者であったが、王朝が廃止されたため、実際に王になることはなく、20年間にわたりハワイ準州のアメリカ下院議員として、ネイティブハワイアンの権利擁護のため仕事をした（ハワイナビ，2014）。彼の功績である1921年制定の「ハワイアン・ホームステッ

ド法」により、ハワイの特定の土地がネイティブハワイアンの居住地として確保され、現在に至っていることから、ハワイ島コナにある居住地とその周辺の素晴らしさを歌い、クヒオ王子を称えた曲である。

プイリ（竹の楽器）を両手に持ち、打ち鳴らしながら楽しく踊る曲であり、親子フラ教室の参加者も母親、子ども、学生（希望者）が自分用のプイリを購入し、第一筆者がウクレレで伴奏をして練習に励んだ。この曲の練習で課題となったのは、外国人としてフラを踊ることの意味である。後述するように、古典フラにも王族を称える曲は多いが、どのような気持ちで踊るべきなのか、日本人には難しい課題でもある。ハワイのために尽くした王族の功績により、文化や自然が守られ、現代までフラが継承され学べるということに感謝する、あるいは日本でも同様に先人の知恵や功績があったからこそ現在の豊かさがある、など、ややこじつけのように考えて取り組んでいるが、いまだ確信の持てるような意味付けは見いだせていない。

⑦手をつなごう

学生スタッフによるオリジナル曲である。発端は、2013年6月のミーティングで出た「親子フラ教室のオリジナル曲を作る」というアイデアであり、その場で引き受けた学生スタッフに、振付をしやすいキーワードだけ伝え、親子フラ教室のイメージで作詞作曲をしてもらった（表3）。完成した曲は生演奏で披露され、録音したものをCDで配布し、母親たちに分担して振付を考えてもらい、それらを教え合って練習した、完全なオリジナル曲である。

表3 「手をつなごう」（作詞・作曲 来山晴香） 歌詞

今日も青い海の上を 鳥たちが飛んでいる 新しい風と共に 次の季節運ばれて来るよ	赤い花も黄色い花も どんな花も とてもきれいだね
君と出会えたこと 笑えること すべてがとても輝いているよ	寂しいときも 辛いときも みんながいれば きっと大丈夫
みんなで歌おう 声を揃えて 音が集まって生まれる 素敵なハーモニー	みんなで踊ろう リズムに合わせて 心が通じ合って生まれる 素敵なステージ
みんなで歌おう 手と手を繋いで 1つの大きな輪から生まれる 最高のハッピー	みんなで踊ろう キラキラ笑顔で たくさんのスマイルから生まれる 最高のハッピー
	空に届くように 愛を込めて アロハ！

(2) 古典フラ（フラ・カヒコ）

⑧ウラノヴェオ

タイトルは「赤い光」を意味する。作者不詳のトラディショナルソングであり、古典フラの入門曲として位置付けられる曲である。ノヒリ岬、ホオヒエの森、ハナレイ湾など、カウアイ島の自然の素晴らしさにたとえて、カモハイ酋長の偉大さが称えられている。カモハイ

酋長はカウアイ島の支配者とされるが、詳細は不明である。

古典フラの中でも特にシンプルな曲調と振り付けであるが、親子フラ教室で古典フラの1曲目として練習した時は、「カヘア（掛け声）」や「エアラー（エンディングの動作）」など、現代フラにはない独特の決まりごとに戸惑ってなかなか習得できない様子があり、指導の難しさにも直面した。

⑨カーヴィカ

作者不詳のトラディショナルソング。タイトルは、英語名 David のハワイ語読みであり、デイヴィッド・カラーカウア王を指す。カラーカウア王は、フラを含めたハワイ文化を復興させた王であり、ワイキキのメインストリート「カラカウア大通り」やフラの競技会「メリー・モナーク（「陽気な王」の意）フェスティバル」に名を残す、今もハワイアンに愛される王である。姪であるカイウラニ王女と日本の皇室との結婚を提案したが実現に至らなかったというエピソードも有名である。この曲の歌詞には、そのような積極的な外交政策や、ハワイに電気を導入したこと、政治的陰謀から出自に対する疑惑をかけられたことなど、カラーカウア王やハワイ王朝のエピソードが比喩的に歌われている。フラ曲としては、ウラノヴェオと並ぶ、古典フラの入門曲である。

第一筆者は、自身が習って間もない頃に親子フラ教室で教える状態だったため、理解の浅さを痛感しながら若干心許ない思いでこの曲を教えていた。母親や学生たちから、「古典フラが楽しい」と言われ、驚き、安心した曲である。

⑩ケ・オネ・ナニ・ヴァレ

第一筆者が作詞、作曲、振付をした曲であり、タイトルは「美しい故郷」を意味する。クムフラからの課題で、自分の住んでいる土地、または生まれた土地をテーマにして曲を作り、2013年の発表会で披露した。ダンス振付曲と、詠唱のみのチャント曲1つずつが課題であった。

後述するように、チャント曲は岡山の旭川をテーマにした（⑩ヴァイ・オ・カ・ラー）。しかし、県外の参加者も少なくないことから、ダンス曲は特定の土地に限定しない詞にして、誰にとってもイメージを投影しやすいようにした。懐かしい故郷の思い出、現在住む場所への感謝、子どもたちが生きる未来への希望をテーマにして作った（表4）。

発表会とハートカフェで披露したが、作曲者、振付者、指導者を兼ねている第一筆者にとって、自分が作った曲を踊ってもらうということは、喜びや感謝と共に恐縮する感覚も生じる体験であった。衣装も曲にふさわしくオリジナルで

表4 「Ke One Nani Wale」歌詞

Ho'omana'o ku'u one hanau Ike 'ia ka lani uliuli Ho'olono 'ia ka leo nani He aloha iho no, ke one nani wale
Eia ka mana'o ma'a nei Ike 'ia ke kuahiwi ki'eki'e Honi 'ia ke 'ala o ka 'aina He aloha iho no, ke one nani wale
Aia ke ola i ku'u pu'uwai I malama 'ia ke kai malie I aloha 'ia ka lei hiwahiwa He aloha iho no, ke one nani wale

制作する必要があったことから、母親たちと相談し、岡山名産のピオーネ、マスカット、桃をイメージする紫、黄緑、ピンク色を使い、岡山市の花である菊の花のレイを頭に、大学すなわち知の象徴であるクワイの実のレイを首に、ハワイの神聖な植物であるティのレイを手足に巻く、というコーディネートにした。

⑪アウヘア・ヴァレ・エ・クワイボ

クムフラの特別レッスンで、即興的に生み出された曲である。クムフラは、レッスン時に子どもを抱いて踊っている母親の姿を見てインスピレーションを受けた、母親の首にまわされた子どもの腕がレイのように見えた、と、曲のイメージを語った。愛する我が子を胸に抱いている、子どもは愛しいレイのような存在、という詞である。パフドラムで伴奏する曲に特有のカッイ（入場）とホッイ（退場）のパートがあり、パフドラム曲初挑戦の母親たちも踊りやすいよう、短く優しい雰囲気曲になっている。その場で、自分たちにふさわしい曲が作られ、踊られ、教わる事ができたという体験は非常にエキサイティングなものであり、後日の茶話会でもその感動が熱く語られた。

⑫ヘ・レイ・ウィリ・イア・ノ・ラカ・エ

クム・ケアラ・チンの作詞作曲による、フラの女神ラカをモチーフとした曲である。タイトルは「ラカのために編まれたレイを捧げる」という意味であり、フラダンサーが踊るための身支度をやるプロセスが描かれている。すなわち、手足のレイ、首のレイ、頭のレイの順に身につけ、最後にティの葉で作ったパウスカートに身につけて、準備の整った自分自身を女神ラカに捧げる、という、身支度の儀式である。フラを踊ることそのもの、踊り手や歌手の今ここを歌う自己言及的な詞は、フラ曲に多くみられる特徴である。

親子フラ教室では、パフドラム曲の2曲めとして練習した。

(3) オリ（踊りを伴わないチャント）

これまでに親子フラ教室のレッスンで用いたオリは4曲であり、⑬以外はクム・ケアラ・チンの作である。

⑬ホー・マイ・カ・イケ

シンプルな構成の短いチャントである。「私に知恵を与えてください」という意味であり、歌詞に出てくる「イケ・パバルア」は、伝統的ハワイ文化のキーワードの一つとされる。イケとは「見る、知恵」、パバルアとは「二重の」という意味である。よってイケ・パバルアは、複眼視、ものごとの様々な側面を知り、認めることを指し、ハワイの重要な価値観の一つである。自我を超えた大きなエネルギーとつながろうとする祈りの詠唱であるが、単調なメロディーのため、お葬式みたいだという感想もあった。

⑭カウ・マイ・カ・ラー

他のチャントよりもメロディアスな曲であり、詞も情景描写的である。雲の隙間からのぞく太陽が祖先神の守護を、太陽の東から西へと進む動きは東西の文化交流を意味する。

⑮ヒキ・マイ

太陽があり、偉大な山があり、祖先神がいて、それらから無償の愛を受け取る、というイメージが歌われる。

⑯ヴァイ・オ・カ・ラー

第一筆者が作曲したチャントであり、前述した⑩ケ・オネ・ナニ・ヴァレとセットで作ったものである。ヴァイ・オ・カ・ラーとは直訳すると「太陽の川」という意味で、岡山市の中心、就実大学のそばを流れる旭川を指している。春に桜をはじめとする花が咲き、夏に光（日光、蛍、花火）が輝き、秋に野菜や果物が実り、冬には冷たい風が吹く、旭川の四季を歌い、自然がもたらす恵みと厳しさを表現した（表5）。ハワイ語によるチャントの作詞作曲は大変にハードルの高い試みであり、クムフラの助けを得てなんとか形になったというのが実際のところであるが、制作過程において、住んでいる土地のことをじっくり考え、イメージを言語化する作業は、抽象的な概念ではなく実感をこめて「自然との共存」や「土地の恵み」とは何かを捉え直す作業であり、大きな学びとなり得るトレーニングであることがわかった。

表5 「Wai o ka La」歌詞

Eia maila ka wai
Wai 'a'ala o ka pua
Ola ka la, Ola ka mauna

Eia maila ka wai
Wai lamalama e
Ola ka la, Ola ka mauna

Eia maila ka wai
Wai ono o ka hua
Ola ka la, Ola ka mauna

Eia maila ka wai
Wai 'olu o ka makani
Ola ka la, Ola ka mauna

(4) キッズダンス

⑰アロハ・エ・コモ・マイ

ディズニー映画「リロ・アンド・スティッチ」のテーマ曲。エ・コモ・マイとは「ようこそ」の意味である。子ども向けのダンス振付が何パターンか作られており、それらを参考に、フラのステップを加えて振付をアレンジした。2012年のなでしこ祭ダンス甲子園にはこの曲で出場し、⑱パクパクフラダンスを取り入れるまでの2年ほど、毎回の活動の最初に踊る曲にしていた。

⑱パクパクフラダンス

NHK教育テレビの「いないいないばあっ」という番組の曲に、子どもたちも踊りやすいようにオリジナルの振付をした。2013年6月のミーティングでのGさんの提案がきっかけであった。2014年のなでしこ祭ダンス甲子園にはこの曲で出場し、出張フラの際も子どもたち

とサポートの学生がメインで踊る曲にしている。

⑱エビカニクス／⑳サンサンたいそう／㉑ありのままで／㉒妖怪ウォッチ

フラ曲ではないが、子どもたちが知っている曲、踊りやすい曲として音源を用意した。⑱⑳は毎回の活動の最初の「キッズダンスタイム」で「パクパクフラダンス」と共に全員で踊り、大人にとってはややハードな準備体操にもなっている。㉑㉒は自由遊びの一環として試しに流してみたところ、子どもたちが夢中になって踊りまくり、リクエストされて何度もリピートし踊り続けるということがあった。⑱⑳は学生スタッフが、㉑㉒は子どもたちが既にマスターしており、母親や教員が教わるという新しい体験となった。他のフラ教室でも本格的にレッスンを受けている母親たちが、教室の先生の許可のもと「花は咲く」の振付を共有してくれて皆で踊ることができたように、教員が教えるばかりでなく、他のスタッフや親子参加者が他で学んだことを持ち寄り、教え合うという、新しいスタイルが展開する可能性がふくらんでいる。

4. 考察

(1) フラ曲の主題

前節で挙げた、親子フラ教室のレッスンで使用した曲は、その形式と目的から便宜的に(1)現代フラ(フラ・アウアナ)曲、(2)古典フラ(フラ・カヒコ)の踊りを伴う曲、(3)踊りを伴わないチャント(オリ)、(4)キッズダンス曲に分類された。(1)～(3)のフラ曲の詞の内容や踊られる場面を検討していくと、古典か現代かという分類を超えて、「誰のために」「何のために」曲を作り、歌い踊るのかという観点での整理と分類が可能である。そして、そのような関係志向性は、古典から現代まで一貫する、フラの本質的特徴ではないかと考えられる。そこで、ここでは曲の主題に着目した整理と分類を試みる。ただし、(4)キッズダンスの⑱～㉒は元来フラとは関係のない曲であるため、ここでの検討からは除外する。

1) 「みんな」「わたしたち(三者以上)」のために

「月の夜は」「エ・フリマコウ」「手をつなごう」「アロハ・エ・コモ・マイ」「パクパクフラダンス」の詞は、フラを踊ることそのものがテーマとなっている。南国の風景の中で踊る喜びや、一緒に踊る仲間との一体感が歌われる。「エ・フリマコウ」は、恋人との二者関係が主題であるという解釈も可能であるが、ハワイ語の文法上、「マコウ」は三者以上を指す詞であることから、ここに分類する。

2) 「あなた」「わたしたち(二者)」のために

「ハナレイムーン」「見上げてごらん夜の星を」には、美しい光景と、その場面を自分と共有する親密な誰か、という二者関係がある。「ホワイト・クリスマス」は、友人または家族が幸福な日を過ごすことを祈り、「アウヘア・ヴァレ・エ・クワイボ」は、自分の子どもへの愛情を歌う曲である。いずれも、「自分と愛おしい誰か」の二者関係がテーマとなっている。

3) 「王・酋長」のために

「カラニアナオレ」はクヒオ王子、「ウラノヴェオ」はカモハイ酋長、「カーヴィカ」はカラーカウア王を称える曲である。古典フラにはフラ・アライ（チーフ）というジャンルがあるほど、王族やハワイ王国統一以前の支配者を称える曲が多い。フラが王宮で踊られ、捧げられていた歴史を物語るものでもある。

4) 「土地」「自然」のために

「ケ・オネ・ナニ・ヴァレ」「ヴァイ・オ・カ・ラー」は、生まれ育った土地や住んでいる土地への感謝をテーマとしている。別のカテゴリーに分類されているが、「ハナレイムーン」「カラニアナオレ」なども、特定の土地の美しさ、素晴らしさを称えている。

5) 「神」「先祖」のために

「ヘ・レイ・ウィリ・イア・ノ・ラカ・エ」は女神ラカに捧げるフラ曲である。また、チャントの「ホー・マイ・カ・イケ」「カウ・マイ・カ・ラー」「ヒキ・マイ」は分類が難しいが、いずれも自我を超えた大きなエネルギーに祈りを捧げる詠唱であると言える。

(2) 親子フラ教室における方向性の模索

レッスン使用曲の変遷にも現れているように、親子フラ教室は、その都度活動の方向性を模索しながら継続している。本稿で報告した期間は特に、第一筆者のトレーニング環境の変化に伴い、古典フラのみのややストイックなレッスンから、現代フラも含めたレッスンへと軌道修正するという転換点があった。インストラクターのオリエンテーションや環境の変化が教室の方向性を左右することは、むやみに行われるべきではない。しかし、教える側もまた学び続ける人間であり、不変で完全な存在であることは不可能である。よって、教える側は常に自身の変化を自覚し、率直に表明して話し合うことが必要なのではないかと思われる。

今回、参加者がそのような変化を受け入れ、活動への参加を続けてくれたのは幸いなことであり、母親たちのおおらかさやお互いの信頼関係に助けられたと言える。また、親子フラ教室全体にとって、一つの危機を乗り越えて次のステップへと進む契機であったのかもしれない。

(3) 能動性と受動性の両立という課題

学生が作ったオリジナル曲に母親たちが振付をしたこと、フラ教室で学んだ母親たちが他の参加者に教えてくれたこと、子どもたちに踊りを教わったこと、母親の紹介で外部施設での出張フラを行ったこと、などの体験は、「教える—教えられる」関係に柔軟な双方向性をもたらすものであり、親子フラ教室の新たな可能性を示す動きであった。

これまで述べてきたように、子育てで支援および実践的教育活動としてフラを教えるという実践は迷いの連続であり、ためらい、心許なさ、不全感など、様々な葛藤が生じることになるし、それらは抱え続けるしかないものであると思われる。親子フラ教室がもつ、教育活動

であると同時に支援活動であるという二重性が、「指導」と「支援」のはざまでの揺れ動きを生じさせる。方針をはっきりと示し、生徒を導く「指導者モデル」と、利用者・クライアントのニーズを聴き取り、添っていく「支援者モデル」の両方をバランスよく実現することは、容易な課題ではない。

しかし、その課題に取り組み続けてきたことが、前述したような「教える—教えられる」関係に柔軟な双方向性が生じていることにつながっているのではないかと考える。全てをコントロールし計画立てて運営するのではなく、参加者個々の成長や、親子フラ教室全体の成熟に応じて起こる変化をキャッチし、それらに合わせてプログラムやイベントを編み出すような、能動性と受動性のバランスが、このような活動の運営スタッフに必要なスキルであり姿勢であると思われる。

5. おわりに

本稿では、2013年10月～2014年9月における親子フラ教室の活動を報告し、その模索と探求の過程について、これまでのレッスン曲のレビューを通じて考察を行った。

今後の活動上の課題として、学生スタッフの入れ替わりと引き継ぎがある。活動開始時から参加しているスタッフは卒業を控え、現在主力となっているスタッフも3年生であり、下級生の育成が課題となっている。また、活動開始時には0歳・1歳代だった子どもたちも、来年度には最年長児が5歳児となり、小学校入学が意識される頃になってきた。親子フラ教室の対象者、活動時間や内容について、改めて検討する必要があるが生じている。

研究上の課題としては、4年目に入った活動経過をまとめ、理論的に位置づけていくことと、参加者個々の体験について個別に調査することが挙げられる。参加者には研究者も含まれている。親子フラ教室の活動経過が研究者自身の内的体験とどのように呼応しているのかを丁寧に描き出すことが、アクション・リサーチの発展の上で有意義であると考えられる。

謝辞

楽曲や振付の使用に許可をくださったクム・ケアラ・チン、いつも温かく見守り応援して下さっている教育心理学科の先生方、ゲスト参加して下さった幼児教育学科ズビャーギナ山田章子先生と学生の皆さん、そして本活動に継続参加し、研究への協力および活動内容の公表を快諾して下さった親子・学生スタッフの皆さんに、深く感謝いたします。
MAHALO.

引用文献

- 原久美子 2008 フラダンスによる健康運動教室． ナップ
早津敏彦 2007 日本ハワイ音楽・舞踊史—アロハ!メレ・ハワイ． 長崎出版
ハワイナビ 2014年3月24日 3/26 プリンズ・クヒオ・デー【州の祝日】． <http://hawaii>.

navi.com/special/5050798 (2014年11月4日閲覧)

鳥山親雄 2009 ハワイアン・メレ1001曲ミニ全集. 文踊社

山田美穂・下山真衣 2012 母子・学生・教員による「親子フラ教室」の成立・展開過程—ダンスを通じた子育て支援の試み. 就実論叢, 41, 121-134.

山田美穂・下山真衣 2013 母子・学生・教員による「親子フラ教室」の変容・成熟過程—重層的な学びと遊びの場として. 就実論叢, 42, pp.81-97.

山田美穂・下山真衣 2014 母子・学生・教員による「親子フラ教室」の個性化過程—「受け継ぐこと」と「生み出すこと」. 就実論叢, 43, 197-210.